

令和元年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の向上を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が多数寄せられました。宮代哲彦委員長、萩元幸治副委員長、井上謙、高梨智、清野史康、米山謙委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会では、最優秀2編、優秀5編、佳作42編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

最優秀賞

「コンビニ」

県立七里ガ浜高等学校 一年

池田 結月

「いついっしょいませ」と、いつものように作り笑顔で老人を迎えた。私はコンビニでアルバイトをしているが、「コンビニもレジだって全部機械やロボットができるようになってしまえばいいのに」といつも思っていた。

あの日、老人と私が出会ったときから私の心は大きく変わった。その老人はシルバーカーを震えた手と足で精いっぱい押していた。コンビニにこんな老人が買物に来るとは思いもしなかった。老人は私のところへ会計をしに来たが、小銭さえうまく数えられないほどだった。私はつい、一緒に小銭を数えた。

「ありがとう」その言葉で、なぜあんなに心が温かくなったのだろう。一人では荷物をシルバーカーに載せられそうになかったため、私はすぐさま力ウンターから飛び出して手伝った。老人は私に「飲み物だけはここに入れておくれ」とシルバーカーのポケットを指差しながら言った。「ありがとうございます。またお越しくださいませ」この言葉を心からの笑顔で言えたのはこれが初めてだった。その日から老人はよく私のレジへ会計に来るようになった。笑顔で「ありがとう」と言ってくれる老人は、まるで何もなかった目の前に、パッと花が咲いたようだった。飲み物をポケットに入れるのが、私にとっては自分しかできないことをやっているかのように、楽しくて達成感があった。

日本では今、年間死者数約百二十五万人のうち、孤独死は約三万人といわれている。それは割合でいうと、約四十人に一人が誰にも知られることなく死んでいくということだ。その原因として「誰とも話さない」ことが大きく取り上げられている。私たちのおばあちゃんやおじいちゃん世代で誰とも話さず孤独死する人がいると思うととても辛い。日本の伝統や健康のあり方、昔話などを伝えてきてくれた人たちに恩返しをするならば、私はコミュニケーションを大事にすることだと思う。「コンビニだって全部機械やロボットが仕事をすればいい」と以前は思っていた。しかし、若い世代にしかできないいや、私にできることがあると、あの老人のおかげで今は思える。老人にとってただ買物をしてコンビニに行く日常に、私が少しでも笑顔をあげることができれば、それは機械ではなく、人間が私自身が、するべき意味があると思う。今という時代、コンビニは便利であらゆる所にある。そのありふれた日常の中で、私は誰かに笑顔を届け、誰かの生きる喜びに少しでもなれる人になりたい。

最優秀賞

「人参って綺麗ね」

県立新城高等学校 一年

鈴木 こころ

私が中学一年生の冬に、祖母は白内障と診断された。白内障とは、外から光を集めてピントを合わせる働きを担う水晶体が白く濁ってしまい、視力が低下する病気である。祖母は自分の視界に霧がかかり見えにくくなっていくことを隠していたため、発見が遅くなってしまった。さらに手術のための検査では糖尿病が判明し、手術自体できるかどうか危うい状況だった。

手術を受けるためには糖尿病の数値を低くしなければならぬ。母は多くの専門書を読んで血糖値を下げる食材を覚え、減塩を徹底し、食生活を改善しようと懸命に取り組んだ。また、散歩に多く誘ったり、遠回りをして買物に行ったりと、一緒に身体を動かそうとしていた。私も、祖母が風呂に入る時、いつでも支えられるよう一緒に入るなど、祖母の闘病をサポートした。そんな家族の努力もあり、祖母は手術を受け、無事目がしっかりと見えるようになった。

「人参って綺麗ね」は、手術の数日後、夕食のための買物に行ったら祖母の言葉である。久しぶりにすっきりとした視界で世界を見た祖母は、とても晴れやかで幸せそうな笑みを浮かべていた。私はその時初めて、祖母が久しぶりに笑ったことに気がついた。その後、食卓には人参サラダが多く並んだ。食べるたびに綻ぶ祖母の笑顔を見て、嬉しくなったと同時に、楽しさや喜びは健康の上になり立っているのだと強く感じた。

今でも祖母は定期的に通院している。目薬で瞳孔を開いて診察するため、五、六時間は眩しく、帰宅するのが難しい。今までの祖母だったら、「大丈夫」と自力で歩こうとしたかもしれないが、白内障の治療を経て家族を頼るようになり、母とゆっくり川沿いを散歩しながら家に帰ってくる。母は祖母の手術が成功するまで不安で眠れない日が続いた。カフェで買ったコーヒーを手に、祖母が母の腕を掴んで笑いあっていた。歩いて見ると、胸が温かくなる。桜の咲く季節には、母、姉、祖母と一緒に四人で桜を見に出かけた。「桜の色が去年よりも濃く見えるわ」と丸く膨らんで咲いた花を見上げる祖母の横顔を見て、私たちは嬉しくなった。白内障は誰でもなる可能性がある。治しやすく、手遅れになることは少ないと言われるが、患った本人の不安は大きいだろう。その家族も不安な気持ちは本人とそう変わらない。

誰かの身体の健康は、その人の心の健康に繋がり、そしてまた誰かの身体、心の健康をもたらずのだと思う。身体だけでなく心も健康な状態であったこそ、はじめて「健康」と言える。人参の橙色はそれを教えてくれたのだ。私はこのことを祖母の笑顔と共にこの先も忘れることはない。